

霞

— 2020年度冬季展示室だより —

土浦市立博物館
令和3年1月5日発行(通巻第52号)

当館では「霞ヶ浦に生まれた人々の暮らし」を総合テーマに、春(5~6月)・夏(7~9月)・秋(10~12月)・冬(1~3月)と季節ごとに展示替えを行っております。本誌「霞(かすみ)」は、折々の資料の見どころを紹介するものです。展覧会や講座のお知らせ、市史編さん事業や博物館内で活動をしている研究会・同好会などの情報もお伝えします。

古写真・絵葉書にみる土浦(52)

古写真「昭和13年の水禍の整理」



昭和13(1938)年の洪水で被災した家財道具や衣類を整理しているところです。土浦町の家が被災した秋元梧楼(本誌4頁参照)は、家族とともに東村字中(現土浦市中)で仮住まいをしていました。水浸しになった衣類や筆筒を荷車で川へ運び、毎日水洗いをしていたそうです。手ぬぐいをかぶって筆筒を洗おうとしているのが梧楼、隣が娘の三四子、竿に洗い終わった着物をかけているのが妻の寿わ子で【情報ライブラリー検索キーワード「水害」「洪水」】

目次

- 古写真・絵葉書にみる土浦(52) 1
- 博物館からのお知らせ 1
- ふたつの葡萄園(近世) 2
- 土浦を書き留める(近世) 3
- 昭和13年の洪水記録(近代) 4
- 「むいむい」と「はだし」(近代) 5
- 市史編さんだより 6
- 土浦藩土屋家の横顔 7
- 霞短信「かめのこジャーナルの取り組み」 8
- コラム(52) 8
- 情報ライブラリー更新状況 8

博物館からのお知らせ

★★昔のくらしの道具★★ 2月28日(日)まで
小学3年生の校外学習に合わせ、昔の人が使ったくらしの道具を紹介します。

★★博物館のひな人形★★ 1月5日(火)~3月7日(日)
博物館所蔵の、江戸時代後期から大正時代のひな人形を飾ります。

★★はたおり作品展★★ 2月20日(土)~2月28日(日)
はたごしらえ講座受講生とはたおり伝承グループ「綿の実」による作品展です。
綿の種とり体験(会期中全日)やはたおり体験(平日のみ)もできます。

★★第42回特別展「東城寺と『山ノ荘』
—古代からのタイムカプセル、未来へ」★★
3月20日(土)~5月5日(水)

東京国立博物館に収蔵されている東城寺経塚群の資料の里帰りを起点に、筑波山東南麓の山と里を舞台とした信仰と祭りの軌跡をたどります。

◆記念講演会「一つものとその伝播—日吉山王祭を中心に(仮)」
講師：福原敏男氏(武蔵大学教授)
日時：4月25日(日)、13時半~15時 会場：土浦市亀城プラザ

◆館長特別講座「常陸国における天台教団の展開と常陸平氏(仮)」
講師：糸賀茂男(当館館長)
日時：5月1日(土)、13時半~15時 会場：土浦市亀城プラザ

★休館のお知らせ★

- ・毎週月曜日(1/11を除く)
 - ・1/12(火)
 - ・2/12(金)、24(水)
 - ・3/16(火)~19(金)
- ※展示替え期間のため。

★祝日開館します★

- ・1/11(月)成人の日
- ・2/11(木)建国記念の日
- ・2/23(火)天皇誕生日
- ・3/20(土)春分の日

★東櫓を無料開館します★

- ・3/16(火)~19(金)
- ※展示替えのため、博物館は休館中です。

左記のほか、学芸員リレー講座などを予定しています。関連イベントの詳細は、お問い合わせください。

博物館マスコット
亀城かめくん



ぶどうず ふたつの葡萄図

のぶなお ひでなお
—土屋陳直・英直筆—

2020年春に開催した特別展「土浦城」では、土浦藩主土屋家3代陳直（1695～1734）が描いた葡萄の図をご紹介します。この展示が終了した後、土屋家の当主が描いた葡萄図が新たに発見され、当館でお預かりすることとなりました。今回は、そのふたつの葡萄図をご紹介します。

まずはお馴染みの葡萄図から見ていきましょう。左の写真は陳直が描いた葡萄です。中心には丸々と熟した葡萄の房を描いています。房の周りには、大きな葉や、生き生きと伸びる蔓を配しています。いずれも墨の濃淡で葡萄の色みを表現しています。画面の右側に目を向けると、「啓直筆」の署名があります。啓直とは、陳直と名を改める以前の名前です。この葡萄図を収めた箱には「啓直公葡萄之御画」と墨書きがなされています。これを記したのが、もう一つの葡萄図を描いた英直（1769～1803）です。

英直は陳直の孫で、陳直の子篤直（1732～76）の三男として生まれました。長男寿直（1761～77）が5代目となるものの、17歳の若さで亡くなります。寿直の跡を継いだ次男泰直（1768～90）も、23歳で亡くなってしまいました。当主が立て続けに亡くなるなか、英直は土浦藩主土屋家の7代目となりました。英直の葡萄図（写真中央・右）は、陳直のものよりも大きく、大胆なタッチで描かれています。迷いなく筆を運んでいるため、葉や蔓、枝に躍動感があります。一方で葡萄の実は、一粒一粒に墨の濃淡を施すことで、丸みと立体感を表現しています。

葡萄は多くの実をつけることから、古くから子孫繁栄や長寿の象徴として親しまれる題材でした。兄たちが立て続けに亡くなる中で土屋家の当主となった英直は、祖父の葡萄図に思いを馳せつつ、家の繁栄を願い、葡萄を描いたのかもしれませんが。

（西口正隆）



土屋陳直筆「葡萄図」（当館所蔵）



土屋英直筆「葡萄図」
（個人所蔵）



同左（部分拡大）



冬季展示では館内での解説会はありません。左のQRコードから解説動画のウェブページへアクセスできます。

下記の資料もあわせてご覧ください。（近世コーナーに展示）

- 土浦藩士書留（当館所蔵）
- 土屋定直所用 鉄黒漆塗五枚胴具足（当館所蔵）



土浦を書き留める

「墨僊漫筆之稿」

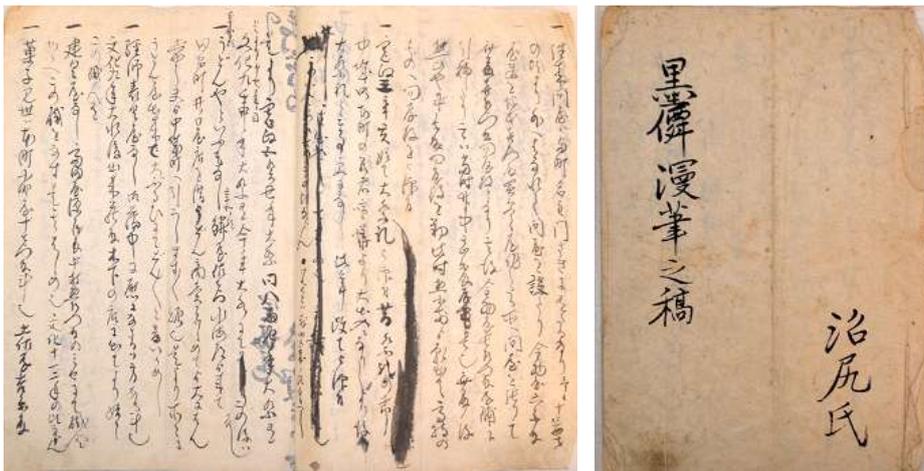
「漫談」「漫遊」などに用いられる「漫」という漢字には、「かってきままに」「とりとめがない」などの意味があります。「墨僊漫筆之稿」はその名のとおり、沼尻墨僊（1775～1856）が、心のままにあれこれと書きつづった手書きの原稿で、全30項です（右の表）。墨僊は、大輿地球儀（土浦市指定文化財）を制作したことで知られていますが、宇宙や地球の道理を考究するそのまなざしを、変貌する幕末の土浦にも向けていました。墨僊の享年は82歳。長命で、土浦町が変わっていく様子を見続けることができました。原稿を執筆した年は定かではありません。嘉永6（1853）年のペリー艦隊の来航と、翌年の日米和親条約の締結を経て、国内の社会情勢は急速な変化をはじめます。この原稿は、さまざまな物や価値観の変化を生活の中でも感じられるようになった、いわゆる「幕末」に書き留められたのではないかと推測しています。

いくつかの項目には、「私が4、5歳のころ」、あるいは「7、8歳のころ」などと書き添えられ、うどん屋や経師屋、すし屋など、幕末には当たり前となった商売が始まった時期を書き留めています。

また、少年が眉毛を剃って濃くする風習や、家に出張して料理をしてくれる料理番が便利なこと、女の子が裁縫を学ぶ場の増加など、気ままに書き留めています。当時の様子を知るうえで貴重な文献です。

（木塚久仁子）

No.	項目
1	中城町の火の用心
2	竈改（かまどあらため）
3	天道念仏の前触れ
4	問屋役の推移
5	祇園祭りでのけんかと大祭り
6	うどん屋
7	経師・表具屋
8	建具屋
9	菓子店
10	せんべい屋
11	石屋の細工は薬研掘り
12	手習指南書
13	鮓（くすし）
14	祇園祭りの底抜け屋台
15	表軒端へわらのうを置くこと
16	中城の長屋
17	絵草子の表が錦摺になること
18	盆花の制作
19	井戸をあおり掘りで掘る
20	料理番[出張料理]
21	棧瓦での屋根葺き
22	亀甲大の提灯は素襖染め
23	市の賑わい
24	童子の眉毛を剃り落とす
25	料理番は重宝
26	裁縫を学ぶ女子
27	江戸まねの餅屋
28	中城町北側御用地
29	中町千手院での藩士の能狂言
30	上高津村では筆墨を中城で購入



「墨僊漫筆之稿」（個人所蔵）左：本文、右：表紙



冬季展示では館内での解説会はありません。左のQRコードから解説動画のウェブページへアクセスできます。

下記の資料もあわせてご覧ください。

- 鑿井図（近世コーナーに展示）
- 土浦市立博物館第30回特別展図録
「沼尻墨僊—城下町の教育者」（2009, 参考図書コーナー）
- 榎陽介「沼尻墨僊『墨僊漫筆之稿』について」
（土浦市立博物館紀要第4号 1992, 同上）



昭和13年の洪水記録

あきもとごろう すいか
—秋元梧楼の「水禍日記」—

昭和13(1938)年6月28日から30日にかけて、市街地が約1か月も滞水する大洪水が occurred。「霞」49号では、新聞記者が見た洪水を紹介しましたが、今回は土浦町の住民であった秋元梧楼(1877~1955)の「水禍日記」を紹介したいと思います。

秋元梧楼は、高崎村(現小美玉市)の河岸問屋矢口半助の五男に生まれ、名を常五郎(つねごろう)といいました。明治35(1902)年に味醂醸造業を営む流山(千葉県)の秋元家に入婿しますが、その後分家して土浦へ移り、運送業などを手掛けました。昭和4年には土浦町会議員もつとめています。日記によると、梧楼は昭和13年6月27日に所用で上京、28日朝から雨が続き、29日には暴風雨になりました。30日に号外で桜川の決壊を知り帰郷を試みますが、汽車も電話も不通、7月3日ようやく常磐線で4時間かけて土浦へ到着しました。

土浦駅へついて安堵はしたものの驚いた。皆舟行である。舟に乗らないものは胸の辺までつかっている。

(中略)…駅前から田舟に乗ったが、少しも身動きが出来ない。(※一部、現代かな遣いに改めています)

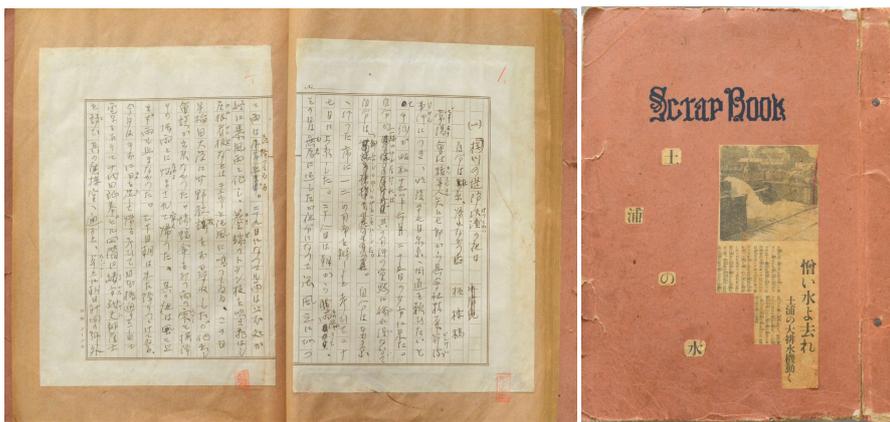
梧楼は町役場に避難していた家族と再会し、下高津・東村(現土浦市)の民家を間借りするなどした後、やっと落ち着ける借家を見つめますが、水禍にあった衣類の洗濯、家財道具の修復に難儀します。

書籍や茶碗や土瓶、櫛、こうがい、床の置物までが泥に隠れて其の臭き中に之を探す手元や足には何匹となく、ひるが吸付く、その悲惨の有様といったらお話にならない。(※同上)

25日間の浸水後、畳を敷きゆっくり寝床につくことができたのは9月10日のことでした。

梧楼は多くの町民が経験した真夜中の増水の恐怖こそ体験しませんでした。避難生活や掃除洗濯など、自らの経験をよく記録しました。「水禍日記」には、400字詰め原稿用紙22枚に及ぶ本文のほか、序文・目次・あとがき、新聞記事の切り抜き53枚・写真絵葉書9枚・電報4枚・写真5枚等が貼り付けられ、体裁よくまとまっています。梧楼には文芸の嗜みや、本を刊行した経験がありました。大正9(1920)年には梧楼が選んだ小林一茶の句を夏目漱石が揮毫し、小川芋銭が俳画を寄せた『三愚集』を企画しています。流山の秋元家

が一茶の有力な支援者だったことがきっかけとされますが、文芸への造詣の深さは、戦後に俳句雑誌「みずうみ」を刊行したことにもつながっているようです。「人に救われんとするよりは自ら救わんと欲することを心がけねばならない」とし、出征していた2人の息子たちに読ませたいと結ばれた日記は、昨年度ご子孫から博物館へ寄贈していただきました。(野田礼子)



「水禍日記」(当館所蔵) 左:本文冒頭、右:表紙



冬季展示では館内での解説会はありません。左のQRコードから解説動画のウェブページへアクセスできます。

下記の資料もあわせてご覧ください。(近代コーナーに展示)

- 洪水写真絵葉書 昭和13年(当館所蔵)
- 洪水の状況を記録した床板 昭和13年(当館所蔵)



「むいむい」と「はだし」

—土浦地方のはたおりとは何か—

平成2（1990）年の「はたおり教室」開講から30年が経過しました。土浦は、「結城紬」や「三河木綿」のような織物の産地ではありません。教室が伝承してきたのは、昭和30（1955）年頃までふつうの農家の女性たちが行っていた、家族の普段着や野良着をまかなうための木綿織りの技術で、いわば「家事」のひとつとしての「はたおり」です。

現在、博物館には13台のはたおり機（高機）があり、そのほとんどが実際に農家で使用されたものです。土浦周辺ではこれを「はだし」（「機足」が訛った地方名か）と呼んでいました。博物館ではひとつひとつの「はだし」に、使用した女性の名前をつけています。たとえば、「よしさん」「おくにさん」といった具合です。そのなかに交じって「たけおさん」がありますが、これは母親のために「はだし」を作った木挽きの小管武夫さんにちなんだものです。「はだし」は近所に住む大工などが、女性の身長や要望にあわせて制作しました。作り手によって「はだし」の上部構造は異なり、二本の柱を中央に立てたタイプ（鳥居形、写真左）と、四本の柱を配したタイプ（四本柱型、写真中央）があって、見た目も大きく異なっています。収蔵する「はだし」を比べてみても、まったく同じものはありません。産業化された織物ではなかったため、はたおり機も規格化されることなく、多様な形態のものが残されているのではないかと推測しています。

糸車で糸を引くことを「むいむい」と呼び、糸車自体もそのように呼称されていました。糸車を回す音が「む～い、む～い」と聞こえるからだそうです。糸車は綿から糸を紡いだり、「から管」とよばれる竹製の軸に糸を巻き取ったりするときに使いました。大人と子供の着物を仕立てるためには約20メートルの布を織ることになります。教室の卒業生が制作に取り組んだ際には、必要な糸を「から管」に巻き取るだけで10時間もかかったそうです。長い時間を費やしたことに驚くと、教室の先生が「から管を巻くときの音は単調でしょ、だから同じことを繰り返して言うことを『管を巻く』というのよ」と教えてくれました。

糸車を回し続けて糸を巻く仕事が、むかしの女性たちの家事の一部だったことなど、衣料を購入するのが当たり前となった我々の世代には想像もできないことです。かつての暮らしぶりとそこに根差した文化を感じ取ることができるのは、「はたおり教室」の伝承活動の成果だと考えています。（萩谷良太）



はだし（鳥居型）



はだし（四本柱型）



糸車（右奥）で、から管へ糸を巻きとる



冬季展示では館内での解説会はありません。左のQRコードから解説動画のウェブページへアクセスできます。

下記の資料もあわせてご覧ください。

- 土浦周辺のはたおり道具（当館所蔵 近代コーナー）
- 映像記録「土浦地方のはたごしらえ」

（情報ライブラリー 展示ホール）



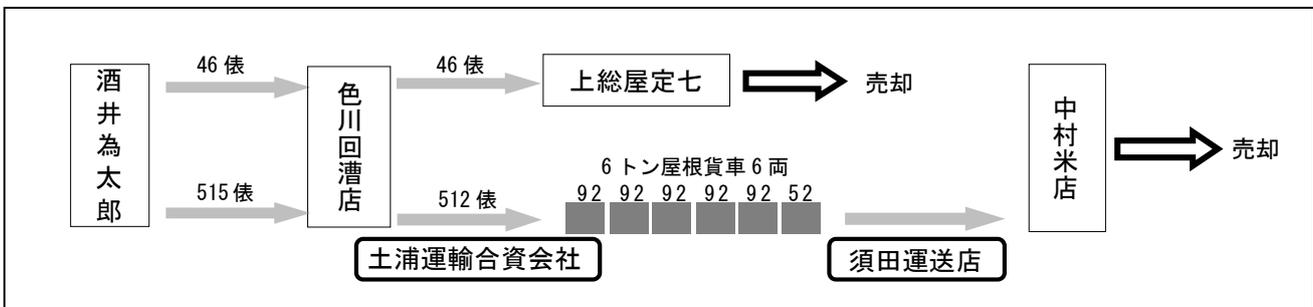
市史編さんだより

小作米販売ルートを探る—酒井為太郎家文書より—

昨年3月『土浦の古文書 第30集』が刊行されました。今回はその中に掲載された酒井為太郎家文書の「小作米穀販売簿」（明治33年、史料番号385）から当時の米の販売ルートを見てみたいと思います。

この史料に注目したきっかけは、「霞」43号で取り上げた齋藤運送店の前身である土浦運輸合資会社（以下「土浦運輸」）と関連があったことです。土浦運輸は明治29（1896）年^{ししつか}穴塚地域で結成された運送会社でしたが、利益配当ができず、結局出資者の一人だった齋藤勝治が受け継ぐ形で齋藤運送店になりました。

今のところ酒井為太郎家の小作米の販売について詳細が分かるのは、この史料だけです。この史料には、明治33・34年度の2年分の販売について記録されています。土浦運輸が、色川^{かいそう}回漕店を経由して東京までの輸送を担当すること、さらに東京隅田川岸の須田運送店に引き継ぎ、深川区材木町の廻米問屋中村清蔵（中村米店）まで輸送することを販売要領として記しています。中村米店は米の販売を行い、土浦農商銀行に為替で送金する形で売上金は為太郎家に届けられました。



具体的な輸送状況を、明治34年度を例に見てみましょう（上の図参照）。34年度は、2つのルートで米の販売を行いました。色川回漕店に保管されていた分（46俵）と、為太郎家の蔵から運び出された分（515俵）です。色川回漕店の保管分46俵は土浦本町の米穀商である上総屋定七に売却されており、土浦町で売買が完結しています。一方、為太郎家の蔵から運び出された分は、土浦運輸が色川回漕店に515俵を運び、そこで色川回漕店による改俵が行われて3俵は「屑シ^{くず}俵」となり、512俵が土浦停車場に輸送されます。そこからは、6トンの屋根貨車6両に載せて東京まで運ばれました（92俵が5両、52俵が1両）。東京では隅田川の須田運送によって材木町の中村米店に輸送され、中村米店では品種ごとに値段を決めて売却しました。品種と買取金額は、以下の表の通りです。

このように、土浦運輸は地元の小作米販売に貢献していました。当時の小作米の販売経路は、他家での販売経路や、他の運送会社と比較することで判明していくでしょう。（市史編さん係 江島万利子）

合計俵数	記号	品種	品種別俵数	相場（円につき）	売上(円)
512	一上キ	閑取上米	10	6升1合	70円49銭
	・上キ	信州上米	29	6升1合	204円43銭
	キ	千本上米	94	6升3合	641円59銭
	・・キ	種違上米	192	6升4合	1,290円
	・キ	上町米	163	7升7合2勺5才	907円31銭
	キ印	町米	24	7升8合	132円31銭

中村米店で売却された
小作米の内訳

土浦藩土屋家の横顔

このコーナーでは、土浦城を200年治めた土屋家の歴代藩主を、系譜を読み込みながらご紹介します。

基本的には『寛政重修諸家譜』を用い、「土浦土屋家系譜」(『茨城県史料 近世政治編Ⅲ』所収)で補足しました。ゴシック体部分が引用です。



その七、土屋英直【つちや ひでなお】

保三郎 主税 但馬守 従五位下

■ ■ **兄たちの死去に伴い藩主に就任** 実際は篤直が三男。

英直は4代藩主篤直あつなおの三男として明和6(1769)年に生まれました。長兄寿直ひきなおが5代藩主、次兄泰直やすなおが6代藩主に就任しましたが、寛政2(1790)年5月12日、泰直が23歳で亡くなり、藩主の座が三男である英直にまわってきました。5月23日に7代藩主に就任、時に英直は22歳、7月28日には將軍徳川家斉いえなり はいえつに拝謁しています。土屋家はこれで安泰と思われましたが、英直も享和3(1803)年8月12日に35歳で亡くなりました。

■ ■ **実質上の減収** (寛政2年)十一月十二日和泉、近江、美作等の領地のうち二万石余を陸奥国石川、岩瀬いわせ、出羽国村山三郡のうちにつさる。

英直の就任直後のことです。土浦藩は和泉(大阪府)、近江(滋賀県)など、関西に所有していた領地のうち2万石分を、陸奥(福島県)、出羽(山形県)など東北と取り換えるよう、幕府から命じられました。名目上9万5千石であることは変わりませんが、農作の長い歴史を持つ関西の領地を、天候によって凶作になることも多い東北の領地と替えるわけですから、実質上年貢収入は減収になります。初代数直かずなお、2代政直まさなおが幕府の要職である老中ろうじゅうをつとめていたため、幕府は土屋家を重く考えていましたが、若くして藩主が次々に交替する隙に乗り、すかさず領地替えを命じたのでした。

■ ■ **先祖崇拜と文芸のたしなみ** (寛政)三年八月十五日はじめて暇いとまたまわりて城地に行

英直が初めて土浦城へ帰るのを許されたのは、藩主就任の翌年、寛政3年8月15日のことで、12月15日には参勤の御礼を將軍に献上していますから、土浦城滞在はおよそ3か月と推測されます。この間の10月、英直は領内小松村の高台に作られた垂松亭すいしょうていを訪れ、「常陽八景詩歌じょうようはっけいしのか」を藩士らと詠みました。垂松亭は父篤直が愛した小さな庵いおりで、篤直はここで「垂松亭八景」を選びました。「常陽八景詩歌」の序文によれば、「英直公は孝心厚く、先君の高尙こうしやうを慕って八景をお詠みになった(意識)」と、篤直の志を継いで新たな名勝を生み出したと書かれています。

英直は、享和2年には江東小名木川沿いの土屋家中屋敷なかやしきの風景を、図巻「別業縮地べつぎやうしゆくち」にまとめました。「別業」は別荘、「縮地」は縮図という意味で、政直が拝領した中屋敷の景勝を描いて1巻にしたものです。英直の時代、数直や政直の逸話集「御代々様逸話いつわしゅう おだいだいさまいつわ」や「有言録ゆうげんろく」が編まれました。英直はまた、数直自作のぶなおの茶杓や陳直の絵画に、「まちがいなく真作である」と極書ききわめがをしています。(木塚久仁子)

このコーナーでは、博物館活動に関わる方々の声やサークル活動の記録などをお伝えしております。

今号は、中央2丁目にて地立堂・城藤茶店を運営されている、工藤祐治さんに寄稿していただきました。

かめのごジャーナルの取り組み

土浦市立博物館の特別展「土浦城」に合わせ、特集「川口川探検、暗渠を辿る」と題したフリーペーパー「かめのごジャーナル」を発行しました。博物館との連携は、特集「『この世界の片隅に』の映画館のあるまち」(2019年3月発行)に続き2回目となります。

博物館の公式展示ではお伝えしにくいものも、フリーペーパーなら伝えられる、そんな思いで連携を図っています。それでも、限りある紙面からこぼれ落ちる内容もあります。今回の取材で、「創作和菓子すぎやま」の杉山さんが教えてくれた川口川の記憶もその一つでした。

中城通りの入り口、福祉の店ポプラの前に立つ、かねきのおやじの像。そのかねきの故大槻会長が修業していた寿司屋が、川口川沿いにあったというお話です。実は、私もかつて故大槻会長にお会いしたことがあり、掃除小僧だった修業時代、中城にお店を出すことが夢だったということをお聞きしました。多くの若者がこの場所を到達点に目指したことでしょう。今は何気なく高校生が通り過ぎるだけのまちかどの風景。実はそこに、積み重なる思いが残っています。風景の意味を知ることは、消えかかった思いを知ることにつながります。

7年前、亀城公園前の空き家に掃除を加えて光を入れ、喫茶店をオープンしました。ここもかつては戦争で夫を亡くした未亡人が、子を育てあげた場所でした。窓の外には四季折々の風景。今は、誰もがくつろげる場所として、お客さまへの飲み物をお出ししています。併せて、フリーペーパーを通じて日常のまちかどの風景を、これからもいろんな方々の力をお借りしながらお伝えしていきたいと思えます。

(地立堂・城藤茶店 工藤祐治)

コラム (52) 御屋形様 常陸小田氏

大河ドラマや時代劇などで「御屋形様」の呼称を用いることがあります。『日本国語大辞典』によれば、「屋形」は貴人の邸宅のほか、「貴人を敬ってという語。また特に、中世、屋形号を許された大名の称」の意味があります。つまり、屋形の呼称は許しがなければ使えません。これを許すのは、室町幕府の足利将軍家や、鎌倉公方です。関東では千葉・小山・長沼・結城・佐竹・小田・宇都宮・那須の8家が許され、後に「関東八屋形」と称されました。

屋形号を得た大名は家臣に、烏帽子や直垂、素襖など武家としてふさわしい服装を身に着けさせることができました。また敬称に「屋形」が用いられるなど、他の武家と異なる家格を得ることができました。

近年、小田氏15代当主の氏治を「戦国最弱」の武将として取り上げる風潮があります。戦に負けることはありましたが、小田氏は家臣に格式ある装いをさせることができる、全国でも有数の武家でした。合戦の勝敗ではなく、当時の格式なども踏まえた上で評価するべきでしょう。

(西口正隆)

情報ライブラリー更新状況

【2021・1・5現在の登録数】

古写真 600点(+0)

絵葉書 512点(+0)

※()内は2020年9月29日時点との比較です。展示ホールの情報ライブラリーコーナーでは、画像資料・歴史情報を順次追加・更新しております。1ページでご紹介した古写真・絵葉書もご覧いただけます。

※新型コロナウイルス感染予防のため、一部ご利用を制限しております。ご了承ください。

霞(かすみ) 2020年度

冬季展示室だより(通巻第52号)

編集・発行 土浦市立博物館

茨城県土浦市中央1-15-18

TEL 029-824-2928

FAX 029-824-9423

<https://www.city.tsuchiura.lg.jp/page/page000865.html>

1~5ページのタイトルバック(背景)は、

博物館2階庭園展示です。

2020年度冬季展示は、2021年1月5日(火)~3月14日(日)となります。「霞」2021年度春季展示室だより(通巻第53号)は2021年5月上旬発行予定です。次回の来館もお待ちしております。

※展示室だより「霞」は、当館ホームページからもご覧になれます。(カラー版)